

変革のパトス

—合理への

5月30日(日)

PM1:00

学館練習室

私の心の中に、「言葉」では語り切れないもの、或いは、論理として決して表出することの出来ない何かがあるものが不定形として存在してきた過去があり、今も存在している現在があり、将来も存在し続けるであろう未来があるような気がしてならない。私が入問である限りそれは永遠に私の体内で生き続けるのであろうか。

戦後民主主義体制の下で、近代的教育制度によって知識を積み込まれ、それらによって培われた、擬制的に「私のもの」でしかない合理的精神が私を支配し、理性という幻影に私が縛り付けられていようとも、その不定形なるものは、最終的には私を動かせることのできる唯一の支配者なのだと思ふ。

でも、今の私はどこから出発すればいいのだろうか。一情況は混沌としている。思想が風化されてしまっている。だからこそ、思想が思想として生き続け、普遍化される為にも私達はもっと生活の中に潜り込み、私達の生活思想の根底にあるものを見極めねばならないと思はれるのである。

「言葉」が宙に浮き、空しく空に舞っている間に権力の側が、民衆の心情をカッチリと握り、彼らを途方もない所へと領導していった過去があったことを私は知っている。その権力と民衆との間の媒介物として「農本思想」といわれるものがあつた。それが権力と民衆との間の媒介物となり得たのは、日本社会の根底に脈々と存在し続けている伝統的、常識的な価値規範を徒に否定することなく、真摯に見つめていたからではなかつたのだろうか。だとすれば、私は私達が権力に再び先を越されぬ為にも、或いは途方もない所へ連れて行かれない為にも、それらのものを見つめ直すことが必要だと思ふし、それらのことをなしてきた思想としての農本主義をもう一度、スポットライトで照らしてみることに意義があると幸えるのであり、むしろそこからしか私は出発出来ないように思えるのである。

甦る農本主義

ひとつの疑念

講演 綱沢満昭

農本主義とは端的に言うなら「農」こそあらゆるものの大本であるという思想なのだが「農」とは産業としての「農業」の意味だけではなく、もっと広く「自然に従って生きる」生き方を「農」という文字にこめた表現であるとも言えるのである。だから温和な自然環境に育まれた日本民族が、先祖伝来うけついできた伝統的な思想でもあつたのだ。

戦前において、農本主義者たちは、確かに権力擁護者であり、天皇制を支える強力なイデオログであったことは歪めない事実である。しかしそれらの形容詞を被せるだけで彼ら農本主義者を闇の中へ葬り去ることで、何ものをも私の眼前に明確にはしてくれないのだ。農本思想は合理的に体系づけられたものではなく、むしろ人間の根底にある非合理性を汲み取っていたが故に、現実生き、現実を動かせる思想として存在し得たのである。また、明治維新以降、日本が必死になって近代化＝西欧化を推進してゆく過程に、抹殺されていった何かを、農本主義者たちが巧みに拾い上げていったとも考えられるのである。

それら日本人の生活思想の根底にあつた非合理性—原始的「心性」とも呼ぶべきもの—が天皇制の孕んでいる自然な「心性」（ナショナルなもの）と合致するが故に、農本主義が天皇制を深部から支え、維持してきたひとつの思想として存在したのであつた。

そのナショナルなものを一切捨象し、全て無視したのが近代日本の知識人たちの思想的な運動であり、それらの運動が悉く天皇制の前に敗北していった理由もその点に求められるかも知れないのである。

私は情況を切り拓く変革のパトスを農本主義者たちの思想の中から何とかして導き出したいと思っているのだが、それは徒な夢に終わるしか他ないのであろうか。